

地域スポーツ組織の発展を支える条件に関する考察 ：スポーツ指導者の指導観の深まりに着目して

鎌田, 宜佑
九州大学大学院人間環境学府 : 博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/7172580>

出版情報 : 社会教育研究紀要. 5, pp.43-49, 2024-02-29. Faculty of Human-Environment Studies,
Kyushu University
バージョン :
権利関係 :



地域スポーツ組織の発展を支える条件に関する考察

— スポーツ指導者の指導観の深まりに着目して —

A Study on the Conditions Supporting the Development of Local Sports Association

— A Focus on the Deepening Philosophy of Teaching of Sports Coaches —

鎌田 宜佑^{*}
Kamata Takahiro

1. 本研究の目的

本論の目的は、地域スポーツ組織における発展を支える条件を、文化としての地域スポーツ活動の内実を支える指導観をつくりあげてきたスポーツ指導者の指導観の深まりに注目して明らかにするものである。そのために、主婦たちによって自主的な運営がなされている地域スポーツ組織として注目される「福岡市主婦卓球愛好会（以下、愛好会）」と、その愛好会に関わり続けてきたスポーツ指導者を取り上げる。

地域スポーツは、オリンピックのための競技スポーツとは異なり、人々の日常生活の中で営まれる文化としてのスポーツ活動として捉えられてきた。また、地域スポーツ組織は、そうした人々のスポーツ活動を保障する環境として展開している。文部省が1995年からモデル事業を実施してきている、地域社会と住民生活に密着したヨーロッパのスポーツクラブに倣った「総合型地域スポーツクラブ」は、そうした地域スポーツ組織の一つに位置付けられるだろう¹⁾。

こうした中、愛好会は、主婦たちによって会の運営を行ってきた自主的な地域スポーツ組織として注目がなされてきた。伊藤恵造（2002）は、地域スポーツ組織における発展の鍵を探るため、『『住民主体』という考えを大切に、自らのスポーツ・文化活動をよりよいものすること（原文ママ）を目指して活動が行われてきている』スポーツ組織に該当する組織として愛好会を取り上げた。その上で、愛好会の発展の道筋から、地域スポーツ組織発展の鍵が、学習会を通じた学習と話し合いの訓練にあったとし、そうした主婦の学習を支えた存在として初代会長の前田恒子さんや、前田さんを支えた公民館主事、田岡鎮男さんを取り上げている²⁾。このように、先行研究では、地域スポーツ組織の発展を支えた条件として、構成員での話し合いの場を通じた学習を促す指導者の存在が指摘されてきた。

筆者も、地域スポーツ組織発展の条件において、人々の話し合いを通じた学習の蓄積を支える指導者の存在は重要であると考え。ただし、地域スポーツ組織における発展の条件を探求するうえで、日常生活の中で、人々によって形成される文化としての地域スポーツ活動の内実の形成を支える指導観をつくりあげてきた人々の存在も重要であったのではないかと考えている。それを示唆するものとして、相戸晴子（2003）は、公民館における住民の組織的な学習運動を明らかにする文脈の中で愛好会を対象とし、愛好会の指導者である小園江慶二さん（以下、小園江さん）が、後述する愛好会の理念に即して練習・大会をつくりあげる主婦たちの「実技面」を支えたことを言及している³⁾。

^{*}九州大学大学院人間環境学府博士後期課程

こうした示唆に基づき、本稿では文化としての地域スポーツ活動の内実を支える指導観をつくりあげてきたスポーツ指導者の、指導観の深まりに焦点化して地域スポーツ組織の発展を支えた条件を明らかにすることを目的とする。なお、ここでスポーツ指導者の指導観の深まりに着目するのは、愛好会会員たちによって形成される文化としてのスポーツ活動の内実を支える指導観がいかんして形成されたのかに焦点を当てるためである。加えて、文化としての地域スポーツ活動の内実とは、人々の日常生活に根差して行うスポーツ活動のことであり、愛好会の文脈に即して言えば、主婦が愛好会の活動の中で卓球をすることを指す。

2. 課題と方法

本稿の目的を達成するために、以下では愛好会において卓球指導を中心的に支えた指導者である小園江さんが、愛好会との関係性の中で、自身の指導観を深めていった過程を明らかにする。また、その形成された指導観に基づく会員への指導のあり方について考察を行う。

研究対象となる愛好会は、公民館の主婦卓球サークルが任意で参加する社会体育関係団体である。「主に、公的施設等を利用して継続的に卓球をしている主婦たちが生活と、スポーツを結びつけながら、より豊かな人間関係を求めて、自主的、自発的に活動しているグループの集まり」として、結成から約50年以上、主婦たちによる自主的な組織運営を継続してきた⁴⁾。

同じく研究対象である、小園江さんは、愛好会活動初期から2023年3月まで、愛好会の卓球指導を中心に支えた指導者で、愛好会における卓球技術を学ぶ中心的な学習の場である技術講習会の主任講師を通年で担当してきた。小園江さんは大学卒業後東京の卓球メーカーに勤めた後、同メーカーの福岡支店に異動。異動の数年後、独立し「こぞのえスポーツ」という、個人経営の卓球用品店及び卓球場を立ち上げ、運営を始めた。卓球教室では、小園江さんの指導の下、何人もの一流選手を輩出し、その中には世界で活躍した選手になった者もいる。

以下の分析は、2023年2月27日に実施した小園江さんのインタビューと、愛好会の会報の小園江さんに関わる文章に基づいて行っている。分析では小園江さんの愛好会との出会いから、会員とどのような関係があったのか、会員との関係の中でいかなる指導観が形成され、指導のあり方に反映させていったのかについて、とりわけ小園江さんの愛好会との関わりを通した学びの過程に着目しながら記述を行った。

3. 愛好会における学びを介した小園江さんの指導観の形成過程

3-1. 社会体育の考え方に基づく指導観形成の契機としての愛好会

小園江さんは、東京の卓球メーカーに勤めていた時、愛好会初代会長の前田恒子さんからの手紙をきっかけに愛好会との関わりを持つようになった。最初にきた手紙の内容は、愛好会の紹介と、大会賞品の寄付の依頼だった。

その1, 2年後、小園江さんはメーカーの福岡支店へ支店長として異動になり、その1年後、個人の卓球メーカー「こぞのえスポーツ」を立ち上げることになる。この福岡への異動をきっかけに、指導も含めた小園江さんと愛好会との本格的な交流が始まった。交流では、サークルへの指導の他、少なくとも週に1回、前田会長の自宅で開催される役員会に小園江さんは必ず参加していた。役員会では、社会体育をテーマとした議論が行われており、小園江さんはその中で、後述するスポーツをすることの価値の平等性を中心に置いた社会体育の考え方を積極的に取り込んだという。その時のことを、小園江さんは以下のように語る。

前田さんと何回か会って、それから福岡に来てちょこちょこ指導して。しょっちゅう入り浸りみたいな感じで前田さんの家に行ってたんですよ。そこで社会体育のことについて質問攻めしてね、考え方を吸収してた。⁵⁾

(筆者注：前田さんの家で) 役員会してたんです。やっぱりそれもアカデミックだったかな。どういう指導が一番必要かとか。その喧々諤々を見てね、競技指向の、片方だけの価値観だけで生きてなくて良かったなあと。⁶⁾

小園江さんは、役員会で行われる社会体育の議論に「アカデミック」な雰囲気を感じ取っていた。その上で、役員会の議論を通して、主体的に学んでいった。さらに、小園江さんはこの役員会での学びを振り返り、「片方の価値観だけで生きなくて良かったなあ」と語っている。この「価値観」について、小園江さんは次のように語る。

チャンピオンスポーツはチャンピオンが一番偉くて、一回戦で負ける子が一番下でって言うところが自然だったわけ。ところが、人間の価値という面で言ったらチャンピオンも負けた人もみんな同じ価値でもって、スポーツをやってるわけね。その、スポーツから得られるものはチャンピオンも一番弱い人も、あの等しく受けるって言うそういう考えがね、愛好会と触れて新鮮だった。で結構のめり込んでいって、あの前田さんと一緒にそういう社会体育の評議会とか委員会なんかなんかそういうのに何回か行かせてもらったし。⁷⁾

ここでは、小園江さんのチャンピオンスポーツの価値観（考え方）と愛好会における社会体育の価値観が対比されて語られている。その例として、チャンピオンスポーツは、「チャンピオンが一番偉くて、一回戦で負ける子が一番下」と言われるように、勝った人、順位が高い人に価値があり、負けた人、順位が低い人は価値がないという考え方を内在させている。それに対し、「スポーツから得られるもの」は、チャンピオンであるかどうかには依らず「同じ価値」を持つ人間に等しく在るという考え方がここでは語られている。これまでチャンピオンスポーツの価値観だけがあった小園江さんは、愛好会での役員会や評議会など、愛好会の活動と深く関わることで、スポーツをすることの価値の平等性を中心に置いた社会体育の考え方を獲得していった。こうした社会体育の考え方を学んだ小園江さんは、前田会長から頼まれるようになったのだという。

(筆者注：前田さんに)「各公民館が卓球サークル作ってて、そこがもう全部『強くなきゃダメ』みたいな教え方のコーチばかりですから。良かったら小園江さん行けるだけ行ってくれませんか」みたいな。⁸⁾

ここで言われる「コーチ」とは、愛好会に所属する各公民館サークルで卓球技術を指導する外部指導者のことを指す。ここでの小園江さんの語りから見られるように、強さ（或いは技術の上手さ）を価値に置いたコーチによる指導が当時の愛好会でなされていたことが窺える。また、そのような中で、社会体育の考え方を学び続ける小園江さんに白羽の矢が立ったことがここでは語られている。ここでは、強さ、勝つことに重きをおいたチャンピオンスポーツの価値観と親和性を持つ、人を強さ、技術の上手さで価値判断する指導観ではない、社会体育の価値観に基づいた、人を同じ価値を持つものとする前提で価値判断する指導観をもった指導者として小園江さんが愛好会に位置づけられていたことが考えられる。

このように、愛好会との関係を持ったことは、小園江さんが愛好会における社会体育の考え方に基づいた指導観を形成させていく契機となった。ここでは契機について丁寧に論じたが、小園江さんはこの愛好会との出会いを契機として、どのような過程を経て指導観を形成させて、会の指導のあり方へと反映させていったのか。次項では、小園江さんの愛好会との関わりにおける指導観形成の過程で重要な契機となった出来事を論じていく。

3-2. 「正しいものに向かう」会員の生き方へ応えることを通じた指導観の深まり

以上では、小園江さんが社会体育の考え方に基づいた指導観を愛好会との関わりの中で学び続け、指導観として形成させていく契機を押さえた。ここでは、愛好会の実際の指導の場面における指導観の深まりについて論じていく。小園江さんは、その契機となった出来事について以下のように語る。

教えてて、もう15年ぐらい前からすごい感動したのがね、その時こうして打つんだよとかやってて。
94歳ぐらいのおばあちゃんに、「おばあちゃん、そんなに無理しないでこれをやろう」って言ったら、
「私も同じことを教えて。もう死ぬ前まで正しいことに向かいたいです」よって。そういうことをおばあちゃんが言ったのよ。「私だけ、もう年寄り扱いしないでください。一緒のこと教えて。」という。それを見てね。「ああこの人年寄りだけん」とか、「こんぐらいにしとこう」とかしない。ちゃんと聞いて、やりたければ教える。ちゃんとしたことをね。⁹⁾

(中略)

それからその学びから得たことがあって。きついことはできるだけさせないっていう風に持ち込むのは違うと思い始めたね。危険度がない範囲できついこともさせた方がいいと。¹⁰⁾

これは、小園江さんが愛好会に指導者として関わり始めた3,4年の間に起った出来事である。小園江さんは、この94歳の高齢の女性会員に出会うまでは、高齢の人には「無理をさせない」ような指導をしていた。そこには、高齢による身体的配慮とも捉えられる一方で、高齢による身体機能の低下がある人に高度な練習は出来ない、しない方がいいという小園江さんの前提となる考え方があったと考えられる。

しかし、「私も同じことをおしえて。もう死ぬ前まで正しいことに向かいたいです」という高齢の会員の言葉を受けて、小園江さんは大きく心を動かされる。それは、90代になっても「正しいことに向かう」会員の生き方への衝撃でもあった。その上で、小園江さんは高齢の会員には無理をさせない、きついことをしない指導から、高齢の会員でも「ちゃんと聞いて、やりたければ教える」指導への指導観の転換を自身の「学び」から得たものとして表現している。ここには、小園江さんが「正しいことにむかう」会員との関わりから、高齢の人は正しいものに向き合うことができる人であるという、人間観の転換が行われている。また、そうした人間観の転換に基づいて、小園江さんは人々が正しいものに向き合うことができるという前提に立って指導の考え方を大きく転換した。このように、小園江さんは高齢の会員の生き方に触れ、応答することを通して、教えている人に対して「正しいことに向かう」ことができる可能性をもった存在として捉える人間観に基づいた指導観を形成させていったのである。

3-3. 愛好会との関わりの結果形成された「正しい卓球」としての指導

前項では、小園江さんの愛好会との関わりの過程で、会員の「正しいことに向かう」姿勢への応答が小園江さんの人間観の転換の契機となったことを論じた。そして、その人間観の転換に基づいて、指導観の深まりの契機となったことを明らかにした。本項では、こうした指導観の深まりの先に、小園江さんがどう指導のあり方へと反映させていったのかを具体的に論じていく。結論から言うと、愛好会との関わりの中

で形成された小園江さんの指導観は、小園江さんが語った「正しい卓球」として表現される。小園江さんは次のように語る。

愛好会は技術研修の時に、なんでも勝つためとかじゃなくてね。正しいもの、高いものを学び身につけるっていうそういう根源の喜びのため。正しいものとか、自分を一步進めるもの。高めるものを覚えるっていう魅力っていうかね？ 次に勉強勉強っていうのも、要するに自分を高めるために卓球を利用してるだけよ。(中略) だから技術講習は、やっぱり卓球を通して正しい卓球を学びましょうってしてるわけ。¹¹⁾

小園江さんは、「勝つため」に教えるのではなく、「正しいもの、高いものを学び身につける」「根源の喜び」のために指導を行うのだという。こうした「正しい卓球」を目的とする指導観は、すべての人が「正しいことに向かう」ことができる人間と見なす小園江さんの人間観が強く表れている。また、この指導のあり方には、愛好会との関わりを通して小園江さんが学んだ「誰もがスポーツで得られるものを平等に享受する」社会体育の考え方にも基づいていると考えられる。実際、この正しいものを身につけたり、自分を高めたりすることについて、小園江さんは指導者の立場から次のように語っている。

結局愛好会の場合はね絶対評価で勝った、負けたで何勝何敗で何位っていうのをじゃなくて、あの例えばね。走り幅跳びでみんな今よりも40cm アップしようとか。そういうのだったら、全員合格ってのがあるじゃないですか。ところが、学校の通知表みたいなだったらどれだけ頑張っても5は3人とかだよ。ところが、絶対評価っていうものをしてあげると全員5っていうことがあるっていう。愛好会はそのいうところを目指しましたね。¹²⁾

ここでは、小園江さんが「絶対評価」という軸を持って愛好会での指導を行っていたことが語られている。それは、正しいものを身につける、自分が高まっていくとは、誰かが勝者、誰かが敗者になるのではなく、すべての人がそれぞれの基準で高まっていくという前提に基づいている。こうした「絶対評価」という軸に基づくことによって、小園江さんは「すべての人が平等に」という社会体育の考え方と正しいもの、自分を高めるものとして指導が共存する指導観を成立させたのである。

とはいえ、80代、90代の人々がスポーツを、それも動きの多い運動となると、やはりけがを初めとした身体的リスクも生じうる。そういったことも踏まえながら、小園江さんは「呼吸脈拍とかだいたい限界も分かるようになってね。ああこれ以上はせんほうがいいとか、結構分かってて、事故はないですね。」と語る。ここには、「正しいものに向かう」ため、高齢者にとって挑戦的な練習を行いつつも、練習中のけが、事故を抑える小園江さんの指導者としての力量が窺える。なぜならば、呼吸脈拍の限界さえ押さえれば、事故無く、かつ会員それぞれの「正しいことに向かう」ための指導ができる、という指導のあり方を形成させていることがこの語りから考えられるからである。

さらに、小園江さんは「正しいものに向かう」ための場づくりにも力を注いでいる。小園江さんは次のように語っている。

そのときその時でね(筆者注：練習するグループを) ちょうどいいわけ方するんですね。で、みんなが頑張ったらやったって。ノルマ達成と。でノルマ達成できなかったら悔しいね、よしじゃあまた来週頑張ろうとか、そういう楽しみの方が勝った負けたより全然長続きます。¹³⁾

勝った負けたの場合、一番の大事な欠点はね、50%の人が負けて不快になる。ましてやトーナメントになったら、一人だけよ、勝ちっぱなし。一回やって成功したら一生しなくていいならいい思い出ですけど。ずーっとやってるうちには不幸な目に遭うし、もし勝ちが幸せて思うなら負けが不幸だって。まあね、だけん、みんなで達成した、仲間とやった、それが一生の宝ですよ。¹⁴⁾

ここにも、「みんなが頑張ったらやったって」というように、「勝った負けた」とは異なる、正しいものの習得、自身の高まり方を可能にする絶対評価に基づいた指導が行われていることが分かる。また、そうした練習は「みんなで達成した、仲間とやった、それが一生の宝」であると表現しており「長続きする」と小園江さんは語る。このように、小園江さんは会員個々人に基づいた関わりを行いつつも、皆が楽しめて「長続きする」場や集団へ全体の働きかけに意識が向いていることが分かる。ただ、それは単なる楽しませる指導とは異なり、すべての人が高まる「正しい卓球」を意識したものになっている。このことを裏付けるものとして、会報に記載されたリーダー研修会における実技指導の場面で、小園江さんの発言を会員が記録したものが以下のように残されている。

主婦の場合一量ができない（学生と違って）→合理性が要求される→共に伸びようと考えよう（サークルの仲間が上手になると自分も上級の球が打てるようになる。それによって自分も又上達できる。）¹⁵⁾

このように、小園江さんはスポーツ以外の仕事に時間を取られる主婦の生活の現状を踏まえ、全員が高まっていく為に、合理的な観点から集団で「ともに伸びる」ことを強く意識している。このように、小園江さんは、会員の姿に応答する中で「正しい卓球」としての指導観を形成し、かつ、主婦の生活の現状を踏まえて場や集団への働きかけを行い、すべての人が「正しい卓球」へと高まっていくための指導を確立させていったのである。

4. 考察 文化としての地域スポーツ活動の内実を支えてきたスポーツ指導者

以上を踏まえ、文化としての地域スポーツ活動の内実を支える指導観をつくりあげてきたスポーツ指導者の指導観の深まりについて2点考察を行う。一つは、スポーツ指導者が会員との関係性をつくり、指導観を形成していったプロセスについてである。小園江さんは、スポーツをすることの価値の平等性を中心に置いた社会体育の考え方など理念的なことは会員との議論の中で吸収し、また高齢会員との関わりの中では何歳になっても正しいものへ向かうことの重要性を学び、指導へと反映させていった。このように、小園江さんは教える者と教えられる者の境界を乗り越え、会員と共に学び合う指導者として指導観を形成し、愛好会の活動をスポーツ指導者として支えていったのである。

そして2つめは、会員との関係性の中でつくられた「正しい卓球」としての指導を、会員の生活状況を踏まえながら一貫して行い、愛好会における文化としてのスポーツ活動の内実を支えてきたことに関するものである。小園江さんは、主婦であること、高齢であることなど、それぞれの会員の生活状況を見つめつつも、それぞれがそれぞれの尺度で変わる可能性を持つものとして捉え、「正しい卓球」を通してその変化を促していく指導を一貫させてきた。

ここで重要なのは、生活と結びついた卓球、あるいは地域スポーツを、楽しむことを前提に、けれども楽しむことに終始させない教育的な活動として位置付け、指導を行ってきたということである。この教育的側面を活動の中に位置付けた点は、商業ベースの個人の消費欲求中心で行うスポーツと、その活動の

質において一線を画す。こうした指導のあり方は、自主的な地域スポーツ組織運営に必要な、愛好会における卓球を通じた人づくりに、何らかの形で寄与した可能性が考えられる。実際、愛好会現会長の橋本太貴子さんは、「私が入った時はもう誰でもどこでもいつでも自分の好きな卓球が自由にできる時代だったので、愛好会しかないって時代じゃなかったんですね。ですから、自分さえ強くなればそれでいいっていう考えでいた時でした。」¹⁶⁾と語るように、「自分の好きな卓球が自由にできる」時代になった中で「自分さえ強くなればそれでいい」という自由な選択に基づいた個人の消費欲求を前提としたスポーツ活動の考えを自身が持っていたことを語っている。こうした個人の消費欲求中心で行うスポーツへの方向付けは、むしろ今の個人の消費を中心とする社会状況では避けづらいものであるが、そうした社会的な外圧へ対抗して、愛好会の教育的な側面を持つスポーツ活動を支える指導観をつくりあげた点は、地域スポーツ組織の発展の条件を考える上でも、評価することができるだろう。

むすびにかえて

本稿では、地域スポーツ組織の発展を支えた条件を、文化としての地域スポーツ活動の内実を支える指導観をつくりあげてきたスポーツ指導者の指導のあり方に焦点化して明らかにすることを目的とした。そのために、卓球指導者である小園江さんが、愛好会との関係性の中で、日常生活と結びついた文化としてのスポーツ活動の内実を支える指導観をつくりあげていった過程を明らかにした。

愛好会との関わりの中で深められた小園江さんの指導観は、スポーツを消費社会の影響を受けた単なる個人的欲求に基づく活動でなく、教育的な活動として位置付けるものであった。こうした指導観に支えられ、会員たちによって形成された文化としてのスポーツ活動の内実、地域スポーツ組織の発展のプロセスを担う人づくりに必要不可欠な条件としても考えられるだろう。

【注】

- 1) 尾崎正峰 (2003) 「〔特集〕21世紀の地域スポーツを展望する 地域スポーツの新世紀へ」『月刊 社会教育』第541巻、国土社、36-41頁。
- 2) 伊藤恵造 (2002) 「地域スポーツ組織発展の「鍵」に関する研究：福岡市主婦卓球愛好会の事例」『日本体育大学紀要』第32巻、2号、104頁。
- 3) 相戸晴子 (2003) 「福岡市公民館における“主婦卓球愛好会”のサークル学習活動史」『福岡公民館史研究：社会教育思想研究』第二号、109-123頁。
- 4) 福岡市主婦卓球愛好会 (1986) 『会報』13号。
- 5) 小園江慶二さんのインタビュー (2023年2月27日)
- 6) 同上。
- 7) 同上。
- 8) 同上。
- 9) 同上。
- 10) 同上。
- 11) 同上。
- 12) 同上。
- 13) 同上。
- 14) 同上。
- 15) 同上。
- 16) 田中理恵子さん、橋本太貴子さんのインタビュー (2022年3月20日)